

2021(令和3)年度 第3回 Salon De 大学コンソーシアム大阪 これからの学習支援を考えるーアカデミック・アドバイジングの観点から 開催報告

日時: 2021(令和3)年 12月9日(木)18:00~19:30 * 情報交換会 19:30~20:30

会場: オンライン(Zoom)

講師: 清水 栄子氏(追手門学院大学 基盤教育機構/教育開発センター 准教授)

申込者数: 10 大学 32 名(うち会員外 3 大学 4 名)

参加者数: 8 大学 25 名(うち会員外 2 大学 3 名)

実施結果: 大学コンソーシアム大阪 HP の「PDF/参加者アンケート」参照

企画・運営: 大学コンソーシアム大阪 研修部会推進委員会

司会進行: 佐藤 浩輔氏(研修部会推進委員会 委員、大阪体育大学 庶務部・研究支援担当)

1. 開催概要

学習支援は大学の担う役割のひとつであり、これまでも学習内容、学習方法、学習環境など幅広い範囲で様々な支援が行われてきた。アカデミック・アドバイジングも学習支援のひとつである。アカデミック・アドバイジングは、学生による目標の設定と達成に向けた支援であり、個々の学生のニーズに添うものである。コロナ禍でどのような支援ができたのか、これからのポストコロナ時代にどのような支援が必要とされるのかを日米のアカデミック・アドバイジングの事例紹介とともに考える。

2. 講演内容

- ・アカデミック・アドバイザー制度とは、専任教員がアカデミック・アドバイザーとして学生一人一人を担当し学生の成績(GPA)や履修状況等を考慮しながら、履修相談や学生指導を行う制度であり、入学時から卒業時まで継続的に指導する体制である(中央教育審議会、2012)。
- ・米国では、学生本人による将来の目標設定とその達成を目的とする支援であり、全学年を対象としている。専門職であるアカデミック・アドバイザーや教員、研修を受けた学生が担当している。学生の抱える課題・ニーズへの対応や情報提供、他部署への紹介などが行われている。方法は面談が中心であり、電話やメールも活用されている。ワークショップの開催や SNS での情報提供も行っている。大学のミッション、規模等により、組織・手段は異なる。専門職団体 全国アカデミック・アドバイジング協会(NACADA:National Academic ADvising Association:The Global Community for Academic Advising)がある。入学から卒業までのスケジュールをイメージすると、1~2 年次には、専攻決定に向けた履修と履修計画を支援し、専攻決定後は専攻分野の履修計画等、卒業がみえてくるころには進路やキャリアを見据えた履修計画等の支援を行う。履修関係以外にも、学生が必要とする情報提供や他部署への紹介を行っている。
- ・日米でのアカデミック・アドバイジングの事例として、日本の国際教養大学、立命館アジア太平洋大学、金沢大学、米国のカリフォルニア大学バークレー校の紹介があった。
- ・米国のカリフォルニア大学バークレー校の L&S アドバイジングでは、コロナ禍で対面での支援ができないことから、Zoom のブレイクアウトルームを活用し 1 対 1 での対話を可能にした。スムーズな支援を行うためバーチャル受付を設置し、日中の通常業務時間だけでなく夜間も受付を行い、研修を受けた学生がピアアドバイザーとして夜間の受付を担当した。利用後の学生のアンケートでは、回答者のうちの 95.3%が「自分の質問に対する回答を得ることができた」と回答していた。オンラインでアドバイジングを実施する上での工夫として、入口をバーチャル受付 1 か所に固定し、予約操作にかかわる解説動画等を設置している。
- ・コロナ禍のアカデミック・アドバイジングについて、米国の CCRC(Community College Research Center)の実施した 23 機関へのインタビュー調査の結果によると、オンラインによるアドバイジングのための準備・工夫として、学内の Wi-Fi 環境整備、アカデミック・アドバイジングのバーチャルサイトの開設、4 日以上 LMS にログインしなかった学生への早期警告アラートの送信等がある。

- ・オンラインによるアカデミック・アドバイジングのメリットとデメリットとして、以下の点が挙げられる。
 メリット: ログインするだけでアドバイザーと気軽に会話ができ、移動する必要がない。対面と変わらず、マスクをする必要がない。
 デメリット: ルームメイトがいる場合は、話しにくい内容があるなどプライバシーに課題がある。対面より会話を掘り下げにくく、深い関係を築くことが難しい。
- ・アカデミック・アドバイザーは、学生の成長やスチューデント・サクセスを促進する重要な役割を担っている。アカデミック・アドバイジングの一番の特徴は、他部署への橋渡しができることである。学内での関係部署との調整、橋渡しは必要。また、他大学のアカデミック・アドバイザーとの情報や意見交換も大切である。今後もオンラインと対面をうまく組み合わせることは重要である。



講師: 清水 栄子 氏



司会: 佐藤委員

3. 質疑応答

質問1: 初年次教育科目では、毎回対面授業とオンデマンド授業の両方の準備を行い、どちらを選んでも不公平のないように配慮した設計にすることが教員にとって大きな負担となっている。学生支援を積極的に行っていきたいが、教員側の負担との兼ね合いを考慮しながら、合理的な支援方法を見つけるポイントは何か。

⇒ 大学として教員にどこまで求めるのかを定められているのかはわからないが、昨年度のオンデマンド教材を適宜活用したり、対面授業の録画をオンデマンド授業として配信することで負担軽減になると考える。

また、支援した学生に聞いてみることで更なる改善策や解決策が見いだせるかもしれない。

質問2: 教員から他部署等に橋渡しする際の注意点や難しさは何か。橋渡しの際に、懸念点に加えて要望も含めて橋渡しするのか、それとも学生に橋渡し先を紹介し、自分で状況を説明させるのか。

⇒ 私の聞いた米国の場合では、学生の状況やアドバイザーの判断による。たとえば紹介をしても自分で橋渡し先に行きそうにない学生については一緒に行くこともある。また、橋渡し先に紹介した学生についての申し送りをすることもある。

質問3: アカデミック・アドバイジングの日米の違いは何か。

⇒ 米国では歴史も長く、組織的な体制が整っている。日本では、最近組織や人材の導入がされ始めたばかりである。しかし担任制やゼミ教員、教務課等の教職員が今まで行ってきた支援もアドバイジングにあたると思っている。米国では、アドバイジングは専門職の存在がある。またすべての教員が担当しているわけではない。日本ではボランティアで行われてきたと感じられる部分もある。組織的に体制を整え学生を支援する機能は必要と考える。

4. 参加者アンケート結果

「参加者アンケート」に掲載。

5. 情報交換会

サロン終了後、サロンの参加者、講師によるオンライン情報交換会を開催。情報共有や意見交換を行い、参加者間のネットワーク構築だけでなく、個々の理解を深めそのことを共有する場として活用された。

以上